

# 平成22年度 事業報告

財団法人 滋賀県陶芸の森

## ◇基本方針ならびに重点事項

滋賀県立陶芸の森開設20周年を迎え、これまでに蓄積した情報ならびに情報収集力、技術力および国内外の人的ネットワーク、知名度、研究成果、所蔵品等の活用、施設管理のノウハウを基盤にして、地域性と国際性および現代性を備えた魅力ある事業を陶芸館や創作研修館、産業展示館の三つの施設を通じて県民の陶芸に対する理解と親しみを深め、広く陶芸に関する交流の場として、積極的な事業の展開を図るとともに、併せて20周年記念事業も実施した。

また、陶器産業の振興と陶芸文化の向上に寄与し、子どもから高齢者まで多くの人が訪れ陶芸文化を体感できる企画を推進し、併せて効率化・活性化された施設づくりを行った。10月に開催された「信楽まちなか芸術祭」の期間中は、「陶芸の森会場」として、太陽の広場では「陶器市」、信楽産業展示館では「信楽ライフ・セラミックス展」が、陶芸館では「特別展・しがらきやき一直方の茶陶 春斎の壺」を開催し、陶芸文化創造の世界的拠点となることを目指し、滋賀県の伝統文化にして重要な産業である信楽焼を紹介した。

## I. 県民に親しまれる施設運営に関する事業

太陽の広場や星の広場など人々が自由に憩い楽しめるよう公園や施設を安全かつ清潔に保ち、芝と植栽の管理に努め、入園者に快適な空間とサービスを提供した。

### 1. 公園機能の充実

#### (1) 陶芸作品の野外設置

陶芸の森という施設の名にふさわしくなるよう、創作研修館に滞在した陶芸家が制作した作品2点を園内に設置し、広く県民に屋外で芸術作品に触れる機会を提供した。

##### 【設置作品】

エバ・ロシュカ(平成21年度スタジオ・アーティスト) 作「駆け抜けるピエロ」

マーク・ミッチェル(平成21年度スタジオ・アーティスト) 作「無題」

#### (2) ボランティア活動推進事業

来園者に対するサービス向上と陶芸文化の普及活動のため、展覧会展示解説、連携授業補助、園内PR活動、陶芸館展示監視補助、園内園芸作業、などボランティアによる活動をより積極的に推進し、利用者へのきめ細かなサービスを提供した。ボランティアの資質向上を目的としたボランティア・ミーティングを実施した。

活動実績 計78日 延べ106人

### 2. 地域の観光拠点としての集客促進事業

信楽焼を抱える、滋賀県南部地域の主要な観光拠点として集客をはかるために、一般のやきものファンを対象とした体験型講座やセラミック・アート・マーケットなどの陶器市、各種のレクリエーションイベントを開催し、来園者にとって魅力的な陶芸の森を創った。

#### (1) しがらき体験 しがらき学ノススメ！

一般のやきものファンを対象に、陶芸の森の施設を活用してやきものについて広く学んでもらえるよう陶芸の体験講座を開催した。初心者向けとして、たぬきづくりややきものの技法別講座、また信楽焼の特徴の

ひとつである穴窯による作品の制作など幅広いテーマを取り上げ、やきもの、ひいては信楽焼に親しんでもらった。

ア 自分のたぬきをつくろう！

広く一般に、陶芸や陶芸の森の事業について知ってもらうための陶芸入門者向け講座として開催。生のだぬきの素地に土をたして、顔を変えたり、色を塗ったりして世界に一つしかない自分だけのオリジナルたぬきを制作した。

<開催期間> 平成22年5月4日(火・祝)、10月10日(日)、11月7日(日) 参加者34人  
イ 実技講座シリーズ

(ア) 技法別講座1 ミニ窯をつくろう！

手びねりでぐい呑み数個を焼けるミニ窯をつくり、後日窯を素焼きして炭を燃料に焼成することで、やきもの原点である窯づくりと焼成を体験した。

<開催期間> 平成22年6月13日(日) 参加者24人

(イ) 技法別講座2 土鍋をつくろう！

手びねりで土鍋を制作した。参加者は蓋と本体を合わせるのに苦労していたが、講師の指導のもと実際に食卓で使うことのできる土鍋を制作した。

<開催期間> 平成22年9月12日(日) 参加者21人

(ウ) 技法別講座3 ラク焼きの茶碗をつくろう！

講師の指導のもと、茶碗などを制作し、後日ラク焼をおこなった。茶碗制作技術の習得とともにラク焼の焼成を体験することが出来た。

<開催期間> 平成22年11月28日(日) 参加者30人

(エ) 技法別講座4 お正月の器をつくろう！

素焼きした大皿に天目釉をかけ、陶画のりの抜き絵技法で模様を描き、お正月に使う贅沢な皿を制作した。

<開催期間> 平成22年12月12日(日) 参加者15人

(オ) 技法講座5 イッテコイ窯で作品を焼成しよう！

平成18年度に築窯したイッテコイ窯を使用した、一般向け陶芸講座を開催した。粘土3kgを使い茶碗、食器など自由に作陶し必要に応じて施釉して焼成した。

<開催期間> 平成23年3月6日(日) 参加者15人

ウ 穴窯講座

信楽焼の伝統技術、歴史を広く一般の方に知ってもらうため、信楽在住の陶芸家による指導のもと実際に作品をつくり、穴窯で焼成をする体験を通じて、その知識と技術の普及、公開を図る講座として開催した。

<開催期間>

初級：平成22年9月19日(日)、9月26日(日)、10月31日(日) 参加者計49人

中級：平成22年10月30日(土) 参加者25人

上級：平成22年10月16日(土)、17日(日) 参加者15人

焼成クラス：平成21年6月19日(土)(説明会) 参加者15人

エ 登り窯講座

信楽焼の伝統に基づき表現の幅を広げるということで、信楽町内在住の陶芸家による指導のもと実際に作品をつくり、登り窯(火袋、一の間)で焼成をする体験を通じて知識と技術の普及と公開を図る講座として開催した。

#### <開催期間>

初級：平成22年7月25日（日）、8月21日（土） 参加者計49人

上級：平成22年8月28日（土）、29日（日） 参加者15人

#### (2) イベントの開催・誘致

陶芸の森を舞台に軽スポーツ、芸能、レクリエーションなど各種イベントの自主開催や公園利用者にとって魅力的で集客効果が見込めるイベント等を誘致した。

##### ア 第4回 信楽作家市 in 陶芸の森の開催について

5月の連休に実行委員会形式で「第4回 信楽作家市 in 陶芸の森」を開催した。この事業により、陶芸関係者には来園者の多いゴールデンウィーク中の陶器販売の機会を、また、来園者には「市」のにぎわいと雰囲気を提供することができ、好評を得ることができた。

<開催日時> 平成22年5月2日～5日の4日間（午前9時から午後5時まで）

出展者数等 約80件（100人） テント 43張

来園者数 22,188人／4日間

##### イ「信楽まちなか芸術祭」関連事業 陶器市の開催について

「信楽まちなか芸術祭・陶器市」として、信楽陶器卸商業協同組合主催の「陶器即売会」と陶芸の森主催の「信楽セラミック・アート・マーケット in 陶芸の森」の2つのイベントを陶芸の森で同時並列開催した。

<開催日時> 平成22年10月9日（土）、10日（日）、11日（月・祝）の3日間

9時～5時まで（最終日4時30分まで）

出展者数：第15回 信楽セラミック・アート・マーケット in 陶芸の森2010

108（テント換算54張）

第57回 信楽陶器まつり即売会

34店（テント換算33張（うち前売場付26））

飲食・物産

13店（テント10.5張）

来園者数等：32,275人／3日間

##### ウ わくわくウォーキング

陶芸の森園内散策路を有効活用し、ウォーキングをしながら歩く楽しさとともに園内の自然や野外設置された多くの陶芸作品の鑑賞も楽しめる企画として、わくわくウォーキングを開催した。

<開催期日> 平成22年12月19日 参加人数 32名

#### (3) 作品の貸出事業

県民に気軽に陶芸に親しんでもらえるよう、創作研修館で制作されたスタジオ・アーティストの研修作品やゲスト・アーティストの作品を、これまで県立図書館等の公共施設6カ所に計24点貸し出しをおこない、陶芸文化の向上に努めてきた。平成22年10月から開催した、「信楽まちなか芸術祭－信楽生まれの国際陶芸交流展」（主催：信楽陶芸トリエンナーレ実行委員会）には38点を貸し出した。

また、平成23年2月から3月に、瀬戸市美術館で開催された「特別展 21世紀の国際陶芸・ガラス展」に財団所蔵作品3点を貸し出した。

#### (4) ホームページ・バナー広告

陶芸の森ホームページに協賛広告を募集し、収入増を図った。

テキスト広告：全研本社（株） 10件/月平均

### (5) 観光および集客促進のための広報活動

信楽町の観光拠点としての陶芸の森を広くアピールするため、新たに観光ミニ冊子「陶芸の森うお〜か〜」を作成し、信楽まちなか芸術祭開催期間中、園内で配布し誘客促進に努めた。またホームページの改善にも努め、各事業の情報の適宜適切な発信に心がけた。

## 3. 施設管理

地域の産業、文化および観光の拠点施設として機能し、やすらぎ感のある施設として良好な状態を維持し、一層利用が図られるよう、日々巡回しながら適切な施設管理に努めた。また、経年劣化による施設の修繕、設備の更新や補修の適時・適切な改修等の実施に向けて、施設設置者である県に対して必要な情報提供等を行い、エレベーターの修繕や法面の修復をおこなった。

## II. 陶芸文化の発信事業

### 1. 展覧会開催事業

平成 22 年度は開館 20 周年ということから、これまでの滋賀の陶芸文化をさらに吟味するとともに、これまで紹介することのなかった視点から展覧会事業を構成した。信楽まちなか芸術祭という街全体の発信の場となるこの年に、連携を図りながら、多くの人に陶芸の森と信楽をさらにアピールできるよう努めた。

来園者の少ない冬季（12 月下旬～2 月末）には陶芸館を休館し、収蔵品の状態チェック、陶芸に関する調査、普及活動、展示設備点検を行った。

#### (1) 展覧会概要

ア 特別展「ハンス・コパー展—20 世紀陶芸の革新」（平成 21 年度からの継続事業）

<開催期間> 平成 22 年 4 月 1 日（木）～6 月 17 日（水）68 日間

総入館者数：8,389 人（123 人／日）

イギリスの陶芸家であり日本で人気を博しているルーシー・リーとともに、それぞれが全く違う作風のなかで、影響しあい新しい時代の陶芸を切り開いたハンス・コパー。本展では、イギリスの現代陶芸の基礎を築いた代表的な陶芸家のハンス・コパーの作品とルーシー・リーの作品 130 点を展観した。これは、世界でも本格的な回顧展として、海外からも注目を集めた展覧会を開催できた。

イ 特別企画展 1 「わくわくミュージアム—ちょっと不思議で、楽しい“やきもの”」（20 周年記念事業）

<開催期間> 平成 22 年 6 月 26 日（土）～9 月 10 日（金）66 日間

総入館者数：8,053 人（122 人／日）

食卓で使う食器や茶器、また酒器や花器など、私たちは実に多くの「やきもの」に囲まれて生活している。手ざわりやかたち、色や模様など種類も豊富だ。それは「やきもの」が本来《みて楽しみ》《さわって感じる》、性格を備えているためといえよう。本展では親しみやすい人物や動物、身近なうつわなどを題材にした、ちょっと不思議で楽しい「やきもの」96 件を展示した。さわって鑑賞する展示を初めて試みるなど、ユニバーサルな視点からより分かり易く、現代陶芸の魅力を紹介した。

ウ 特別展 「しがらきやき—直方の茶陶 春斎の壺」（20 周年記念事業）

総入館者数：13,926 人（170 人／日）

<開催期間> 平成22年9月18日(土)～12月12日(日) 82日間

五代上田直方(1928ー )と高橋春斎(1927ー )は、焼締め、穴窯焼成による信楽焼の伝統技法を守りながら、現代の信楽焼を制作する、現代信楽焼の二大巨匠である。直方は平成3(1991)年に、春斎は平成7(1995)年にそれぞれ滋賀県指定無形文化財保持に認定され、多くの後進作家たちにも影響を与えてきた。信楽焼ファンが多数来園することが予想される信楽まちなか芸術祭の開催時期に合わせて、現代信楽焼を代表する二人の作家にスポットをあてた。一般の人々に信楽焼の魅力を改めて知ってもらう機会となった。

エ 特別企画展2「近江に花開いたやきもの一街道とともに…」

<開催期間> 平成23年3月1日(火)～3月31日(日) 27日間

総入館者数:1,889人(70人/日)

豊かな自然に恵まれた風光の地、近江は“みち”(街道)の国としても知られている。東西交通の要衝として、古代より近江にはわが国を代表する主要な街道が集散し、特色ある文化が育まれてきた。近江が誇るやきもの文化も、そのひとつといえるだろう。また、近世には街道と“まち”を中心に町人文化が発展し、周辺には多くの個性豊かな陶窯が開かれている。本展では、街道をテーマに近江ゆかりの古陶磁作品133件を展示し、その賑わいとともに花開いた湖国の陶窯の数々を紹介した。

オ 収蔵品収集(管理)事業

今年度は、500万円以上の高額作品の定期点検を特別展開幕後の9月に実施。その際に発見された作品の修復も併せて行った。冬期休館中には未撮影収蔵作品や巡回展開催へ向けた湯呑みコレクションの写真撮影、また展示ケース並びに展示用器機の整備を行うなど、作品の点検だけでなく収蔵庫の環境整備にも努めた。

カ 陶芸館ギャラリー企画

陶芸館ギャラリーは、館内唯一の無料展示スペースである。これまでも陶芸の森の役割や事業を、入館者に理解して戴く情報発信の場として活用してきた。今年度はシリーズ湖国の陶芸家展の開催を1回分追加するとともに、信楽まちなか芸術祭に合わせて、信楽焼伝統工芸士会や地元産地組合の協力を得て、「信楽焼の技と美一継承される伝統技術」を開催した。

\*5月22日(土)～6月17日(木)の期間は、ハンス・コパー展関連ビデオを上映。

\*8月28日(土)～9月10日(金)の期間は、収蔵品解説ビデオを上映。

<内容及び開催期間>

(1)シリーズ湖国の陶芸家「石山哲也ー“ゼロ”の痕跡」

会期:4月3日(土)～4月22日(木)17日間

内容:石山哲也は今信楽で注目されている若手陶芸家のひとり。本展では、近年追求している、時代とともに移ろう価値観とその痕跡をテーマにした新シリーズ作品を紹介した。

シリーズ湖国の陶芸家「川崎琢介ーウ・チ・ナ・ル“モノ”」

会期:6月26日(土)～7月15日(木)17日間

内容:川崎琢介は過日や人体を題材に、独自の造形表現を追求している信楽の陶芸家。本展では、断面や餓鬼をテーマとする新作を発表するとともに、焼締め作品にも挑んだ。

(2)アーティスト・イン・レジデンス企画「池田晶一ー揺れ動く、光と影のかたち」

会期:4月24日(土)～5月20日(木)23日間

内容:ゲスト・アーティスト池田晶一が、陶芸の森で制作した螺旋状のユニットが縦横に連なるスクリーンとスツールを展示。光と影がもたらす陰翳とリズムの世界を紹介した。

(3) 「子どもたちの土の造形—本物との出会いから展」

会期：7月17日（土）～8月26日（木） 35日間

内容：小学校との連携授業や宝物づくり事業など、陶芸の森が他に先駆けて取り組んできた独自の普及啓発事業の成果を、子どもたちが制作した作品65点を通して内外に発信した。

(4) 「信楽焼の技と美—継承される伝統技術」

会期：Part.1 9月18日（土）～10月28日（木） 39日間

Part.2 10月30日（土）～12月12日（日） 42日間

内容：信楽のやきものは、先人のたゆまぬ努力と研鑽に支えられ今日まで継承されてきた。本展では、信楽焼伝統工芸士（16人）の作品28件から信楽焼の伝統技術を紹介した。

キ 展覧会関連事業

(1)担当学芸員によるギャラリートーク

ア. 特別展「ハンス・コパー展—20世紀陶芸の革新」

会期中3回実施（3日間3回） 参加者：約60人

イ. 特別企画展1「わくわくミュージアム—ちょっと不思議で、楽しい“やきもの”」

会期中毎月1回実施（3日間3回） 参加者：約55人

ウ. 特別展「しがらきやき—直方の茶陶 春斎の壺」

会期中毎月1回実施（2日間2回） 参加者：約60人

エ. 特別企画展2「近江に花開いたやきもの—街道とともに…」

会期中毎月1回実施（1日間1回） 参加者：約20人

(2)展覧会のテーマに合わせた体験講座

ア. 特別展「ハンス・コパー展—20世紀陶芸の革新」

①子ども向け体験講座「世界にひとつの宝物事業として実施」

a. 「コパーとルーシーも作っていた！すてきなボタンをつくろう！」参加者：8人

イ. 特別企画展1「わくわくミュージアム—ちょっと不思議で、楽しい“やきもの”」

①子ども向け体験講座「世界にひとつの宝物事業として実施」

a. 「プロの陶芸家の仕事を訪ねて…たぬきをつくろう！」参加者：34人

b. 「粘土にフロッタージュして、ちょっと楽しいカップや器をつくろう！」参加者：27人

c. 「カラフルな上絵の転写紙をつかって、皿をデザインしよう！」参加者：24人

d. 「カラフルな上絵の転写紙をつかって、マグカップをデザインしよう！」参加者：19人

ウ. 特別展「しがらきやき—直方の茶陶 春斎の壺」

①一般向け体験講座「創作研修事業「しがらき学のスズメ」として実施」

a. 「大壺をつくる」 参加者：11人

b. 「懐石の器・手付鉢をつくる」 参加者：20人

②子ども向け体験講座「世界にひとつの宝物づくり事業として実施」

a. 「伝統の信楽焼の壺をつくろう」 参加者：19人

エ. 陶磁ネットワーク会議の開催

<開催日>陶磁ネットワーク会議：平成22年5月19日午後～20日午前中（2日間）

平成20年度に結成された県立8館の陶磁器専門美術館・博物館による「陶磁ネットワーク会議」は、加盟館の交流や情報交換を深め、昨今の予算削減に対応するための、共同企画の立案、各館所蔵品の相互利用、緊急時の協力体制を目的とする。平成22年度は滋賀県立陶芸の森が幹事館をつとめ、「共同企画展の実現に向けて」をテーマに当日の会議運営を行った。

また平成22年8月20日および平成23年1月28日には、共同企画展および共同調査研究のための小委員会を開催し、当日の運営・議事進行を行った。

#### <加盟館>

滋賀県立陶芸の森、兵庫陶芸美術館、愛知県陶磁資料館、岐阜県陶芸美術館、福井県陶芸館  
茨城県陶芸美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館、佐賀県立九州陶磁文化館

#### オ. 特別鑑賞塾 2日間 5回実施 参加者：28人

学芸員による詳しい解説と名品を実際に触って鑑賞することにより、美術を鑑賞する眼を養い、感性を磨く場として平成15年度より開催している。今年度は、陶芸の森開設20周年記念特別展でスポットをあてた五代上田直方の「信楽肩衝茶入」と滋賀県在住の造形作家・久谷蔦枝の「睡」を鑑賞した。信楽焼の伝統的な作品と自由で斬新な発想による現代陶芸という好対照な2点の鑑賞は好評であった。

#### カ. 博物館実習 4日間 参加者：8人

平成7年度から、博物館学芸員資格取得のための実習生の受け入れをおこなっている。  
平成22年度は、関西地区の4大学8名の大学生が、当館での博物館実習を受講した。

## 2. 創作事業

### (1) 信楽焼伝統工芸士によるワークショップの開催

20周年記念事業の一環として、信楽焼伝統工芸士によるワークショップを関係団体と協力のうえ、開催した。

<開催期間> 平成22年10月1日(金)、2日(土)、3日(日)(10:00~16:00)

出役者数：延べ14人/3日間

見学者数：約200人/3日間

### (2) 信楽陶芸作家協会会員によるワークショップの開催

20周年記念事業であるシンポジウムの2日目のイベントとして、信楽陶芸作家協会会員によるワークショップを開催した。

<開催期間> 平成22年10月24日(日)(午前10時~午後2時30分まで)

出役者数：4人

参加者数：約160名

### (3) 陶芸の森開設20周年記念シンポジウムの開催

「芸術・産業・観光から、活力ある信楽の次代を考える」—やきものが信楽を創造する  
陶芸の森開設20周年を記念してシンポジウムを開催した。文化の発信と産業の振興、そして地域の観光について、国内外の代表的な関連施設の取り組みを通して、伝統的なやきもの産地信楽にある陶芸の森の潜在力や信楽の次代につながる可能性を見いだす機会を創造した。シンポジウム初日は第1部から第3部で構成され、基調報告を受けた後、パネルディスカッション方式で進行した。

また、2日目には、信楽陶芸作家協会会員によるワークショップと滞在中のゲスト・アーティストであるアグネス・フス氏によるレクチャーとワークショップを併せて開催した。

<開催期間> 平成22年10月23日(土)、24日(日)

10月23日(土)シンポジウム基調報告者

第一部 不動美里さん 金沢21世紀美術館学芸課長

第二部 服部文孝さん 瀬戸市美術館館長

第三部 中島晴美さん 陶芸家、愛知教育大学美術教育講座教授

参加者数：10月23日 約60名

10月24日（日）オープスタジオ

信楽陶芸作家協会会員によるワークショップ

ゲストアーティスト、アグネス・フスさんによるワークショップおよびレクチャー

参加者数：10月24日 約100名

#### (4) アーティスト・イン・レジデンス事業

##### ア アーティスト・イン・レジデンス事業

陶芸の森では、平成22年度末で、48ヶ国、830人の陶芸家、美術家をアーティスト・イン・レジデンス事業で受け入れた。

このレジデンス事業では、滞在作家が制作した作品は、陶芸の森コレクションの重要な部分を形成している。さらに、信楽に一定期間滞在制作することから、滋賀県或いは信楽、また日本のやきもの文化について理解を深めてもらう機会ともなり、情報発信としての役割も担っている。

##### (ア) スタジオ・アーティストの受け入れ

海外 14人

(アイルランド、アメリカ、カナダ、大韓民国、中華人民共和国、香港、デンマーク、フランス、ベルギー、)

国内 24人 計38人

##### (イ) ゲスト・アーティストの招聘（一部公募を含む）

今年度は、5名のゲスト・アーティストを新たに招聘した。昨年度からの継続者2名と併せて計7名であった。

イングリット・アリック（21年度より継続 エストニア・公募）

奈良 美智（21年度より継続 栃木県）

アリソン・ブリトン（イギリス）

張 清淵（中華民国）

アグネス・フス（ハンガリー・公募）

山村幸則（兵庫県・公募）

アニー・ワン（中華人民共和国 香港・公募）

##### イ 情報発信の強化（国内外の関連機関との連携）

国内外の陶芸関係の団体等やアトリエ・ダール（フランス）などとの連携を、過去数年の実績元に強化していった。また、3年目を迎えた、招聘プログラムの一部公募制については、若手の陶芸家の登竜門として一定の位置づけが得られた。

##### ウ やきもの技術相談員制度および情報閲覧室の整備について

やきもの技術相談員制度（人材バンク）をつくり、信楽に培われた貴重な技術のアドバイスを受け、若い陶芸家への技術の継承ができるよう体制を整えた。また、緊急雇用対策事業を活用し、各種データの整理やデジタル化をおこない、情報閲覧室の整備を図った。

相談員制度活用実績 2回 対象者 計8名

#### (5) 若手支援事業

地域産業である信楽焼の担い手たちとの交流、感性強化事業

地元との連携強化として、信楽焼の担い手である地元の業界団体の若手技術者や作家らを短期間受け入れ、スタジオ・アーティストやゲスト・アーティストとの交流を促進させ感性の強化を図る事業については、平成22年度は、20周年記念事業として実施した地元の作家ら

によるワークショップを通じた交流による試行をおこなった。

#### (6) 図書室の整備

陶芸の森の図書室については、14,000冊あまりの蔵書及び雑誌が所蔵されている。近年は、関係先から寄贈される展覧会カタログ、雑誌等の数が増えており整理が追いつかない状況であったため、緊急雇用対策事業を活用し、図書の整理等をおこなった。

### 3. 子どもやきもの交流事業

陶芸の森の特性を活かして、やきものに関する鑑賞教育や体験教育をさまざまな形で積極的に行った。学校との連携プログラムをさらに充実させ、信楽焼をはじめとした陶芸文化の普及や、陶芸の森へのリピーターを促進し、次世代に亘る陶芸の森ファンの獲得に努めた。

#### (1) 「本物と出会うー総合的学習プログラム事業」宝物事業と連携

陶芸の素晴らしさなどを広めるための学校への出張授業や学校が来園して行う来園プログラムを継続し、さらに美術館の事業として内容を吟味しながら進めた。ただし、「世界にひとつの宝物づくり事業」と連携しながら進め、新規のプログラムの開拓などを中心に行った。これにより、信楽へ来て来館するきっかけづくりにつながる来園プログラムについても、同様に継続して行った。

また陶芸館ギャラリーを活用した連携授業の成果展を開催し、学校だけでなく親とともに子どもたちが陶芸の森に来館することを目指し、来園者の新規開拓、展覧会への動員に努めた。

来園見学 参加者：951人（10件）

出張授業 参加者：4864人（25件）

ねんど遊ぶ（来園の親子対象） 参加者：252人（6回）

#### (2) 夏季研修会ー美術館との総合的学習のあり方を探る

世界にひとつの宝物づくり事業と連携

開催日：平成22年8月10日（火）

参加者：41人

学校教育や社会教育、美術館・博物館に携わる関係者を対象に、参加者が実際に本物に触れるなど、実践をとおして陶芸や美術が子どもの健全な成長に果たす上での美術館の役割を考えた。この研修会は、MIHOミュージアムと連携し、陶芸の森では展覧会見学とワークショップで構成した。事業の運営は、世界にひとつの宝物づくり事業と連携をとりながら行った。内容としては、はにわをテーマにして、(財)滋賀県文化財保護協会と連携し、既に授業で取り組まれた学校の教員から実践報告をいただき、その後陶芸家を講師として制作体験を行った。

なお、この研修会に併せて連携授業等で制作した子どもの作品を夏休み企画としてギャラリーにて展示発表を行った。

## III. 産業の振興に関する事業

滋賀県版「甲賀市陶芸産業都市特区」認定の対象地域であることを背景に地域産業、地域文化としての信楽焼陶器産業との連携を強化し、信楽焼の伝統技術や国内外の多様な陶磁器制作技法の紹介および陶芸の森が持つ国際性を生かして、産地デザインの活性化に取り組んだ。

#### (1) 信楽高等学校デザイン科外部研修受け入れ

信楽高校デザイン科の生徒を対象に陶芸や地域産業への関心を高めることを目的に、信楽焼の製品ひとつである「陶製椅子」への絵付けの研修をおこなった。

<開催期日> 平成 23 年 3 月 18 日 (金) 参加者：20 人

## (2) 登り窯焼成事業

信楽陶器工業協同組合青年部を対象に、かつて信楽の製陶業の隆盛を支えた施釉陶器の技術や経験を次世代に確実に伝え、その伝統と経験値の保存、ならびに更なる普及を目的に登り窯で釉薬もの焼成をおこない、既存商品への付加価値付けを試みた。

<開催期日>

焼成： 11 月 1 日 (月) 9 時から 11 月 5 日 (金) 10 時まで

窯だし： 11 月 14 日 (日) 9 時から 12 時

焼成時間：97 時間 参加者： 17 人

## (3) デザイン活性化事業

### ア フィンランド・デザインの関係

フィンランド・デザインの関係では、信楽焼関係企業 2 社と食器とガーデンアイテムをテーマに、共同で新商品の開発に取り組んだ。デザイナーについては、食器については、ナタリー・ラーデンマキを、ガーデンアイテムについては、ターニャ・シッピラをマッチングし陶器の開発をおこなった。

### イ 既存製品をベースにした加飾による新製品の開発

信楽焼の製品の特徴である大物の製品のひとつである、ガーデン・ファニチャー、2 セットを陶芸家・谷野明夫氏のデザインで加飾し製品の付加価値アップを試みた。

### ウ デザインコンペ「アニマル・フィギュア 動物の置物」の関係

信楽焼商品群の中で、タヌキに代表される、動物の置物は人気のひとつであることから、新しいモダンな「アニマル・フィギュア」の開発を目的に、主に美術、デザイン系学科の学生を対象に製品モデルの公募をおこなった。結果、30 点あまりの応募の中から 3 点を選考した。

## (4) 信楽産業展示館の活用

信楽まちなか芸術祭「ライフ・セラミックス展」で過去にデザイン活性化事業－フィンランド・デザインの関係で開発した製品、土鍋 PATA (城山陶器商事株式会社)、つくばい ((有) ヤマトツ陶業) 及び傘立て ((株) 丸滋製陶所) について展示をおこない信楽焼のデザイン活性化に努めた。

## IV. 企画事業

### ミュージアムショップの運営

来園者に、より一層陶芸を身近に感じて頂けるようなサービスを展開した。

展覧会図録や関連グッズ、陶芸関係書籍を販売するとともに、インターネットの活用により商品の提供や販売の促進にも努めた。

販売数： 8, 231 点